

杏林大学 R1年度 テーマⅢ(高大接続)
事業の実施計画・実施内容・実績・成果

具体的な事業内容

- ① アドバンストプレイスメントを高大連携高校に呼びかけ、春学期・秋学期開講科目および夏季集中科目の高校生の履修、単位認定を実施し、単位認定に協力する連携大学を増やしていく。
- ② ライティングセンターの運営により、本学学生ならびに連携高等学校生徒を対象に、集中的に英語・中国語のライティングスキルを涵養する。留学時に要求されるライティング能力を養成するとともに、留学資料の準備等におけるサポートも行う。
- ③ 各種広報媒体を充実させ、タイムリーな情報を発信することにより、本事業の周知ならびに持続的実施の基盤を構築する。広報を担当する幹事校に対し積極的に協力し、高校・大学への広報を進める。
- ④ 大学教育再生加速プログラム（AP）推進委員会、高大接続推進室、ライティングセンターとの連動を継続し、他学部への事業拡大を継続する。
- ⑤ 杏林APラウンドテーブルを継続開催し、SGH指定校・グローバル人材育成取組校等と実質的な連携協議を行い、パートナーとなる高等学校と目的を共有し、協力可能性を把握する。これにより高大接続・連携を強化・拡大する。
- ⑥ 高校生・大学生を対象に、ライティング・プレゼンテーション等の自己表現能力向上のための各種セミナー、プレゼンテーションコンテストを実施し、高校生・大学生の主体的学修意欲を喚起し、留学を契機にしてグローバル人材に成長する学修過程を支援する。
- ⑦ 本事業推進に係る教務的措置の定期的点検を行いながら、ライティングセンターの高校生に対する開放、高校生対象大学教養レベルグローバル関連夏季集中科目等の開講を継続し、グローバル関連科目等の高校生へのオープン化の効率的かつ効果的な事業運営を行う。
- ⑧ 高校生の利益となり新しい高大接続の在り方に沿った本格的なアドバンストプレイスメントの実現に向け、本学でアドバンストプレイスメントによって修得した単位の入学後認定を行う協力大学の拡大を図り、制度の有効性を高める。
- ⑨ 本学で開発した「グローバルルーブリック」は、「学力の三要素」のうち、評価測定の難しい「主体性・多様性・協働性」を指標・項目として取り入れたものである。語学力に関しては、「読む」「聞く」だけでなく「書く」「話す」も含めた四技能を、CAN-DO方式で評価する指標・項目を盛り込んでいる。平成31年度入試において、事業取組学部である外国語学部において、AO入試で選抜方法として使用したことを継続していく。
- ⑩ 本事業のパートナーとなる高等学校（重点連携校）を継続選定し、グローバル人材育成連携協定を締結することにより、平成31年度以降の高大接続体制を整備する。
- ⑪ 「大学教育再生加速プログラム（AP）推進委員会」で本年度の事業実施内容ならびにその評価を総括することにより、年次事業報告書（平成30年度分）を作成し連携高等学校等に送付するとともに、本事業特設サイトでも公開し、広く事業の成果を公表する。
- ⑫ 本事業における教育内容・教育方法・教育成果等に関する発展的連携を推進するミーティングを兼ね、今後の有機的連携に向けた合同教員研修（FD）を実施し、具体的で実質的な取り組みを策定するための意見交換を行う。
- ⑬ 平成30年度年次報告書をもとに「大学教育再生加速プログラム（AP）推進委員会」（委員長：学長）から選出されたメンバーと「外部評価委員（高等学校関係者、有識者）」において、平成30年度の事業の点検・評価を行い、平成31年度以降の改善策を検討する。
- ⑭ 連携高等学校生徒を対象とする「日英中トライリンガルキャンプ」「英語キャンプ」を実施する。本学外国語学部英語学科、中国語学科、観光交流文化学科在学学生、中国からの留学生もピアサポーターとして参加し、ともにグローバル人材を目指す若者が継続的に協力し合うことができるコミュニティの形成を図る。
- ⑮ IELTS対策講座等の留学準備検定試験講座を大学生と高校生に提供し、留学への準備や意識を高める。

杏林大学 R1年度 テーマⅢ(高大接続)
事業の実施計画・実施内容・実績・成果

本年度の補助事業実施計画

- ① 4月 アドバンストプレイスメントを継続実施する。夏期集中科目によるアドバンストプレイスメントも実施する。
- ② 4月～3月 井の頭キャンパスでのライティングセンターの運営を継続し、留学に向けたサポート体制を強化させる。
4月～3月 特設サイトの運営・更新による事業公開を推進し、学内外への事業の周知・波及を図る。10月(予定)に幹事校の主催するシンポジウム・ポスターセッションに参加する。
5月に関西学院大学で開催される全国大学入学者選抜研究連絡協議会(入選研)に参加し高大接続改革の情報収集を行う。
- ③ 4月～3月 大学教育再生加速プログラム(AP)推進委員会、高大接続推進室、ライティングセンターとの連動を継続し、他学部への事業拡大を継続する。
- ④ 4月～3月 グローバル人材育成取組校等との「杏林APラウンドテーブル」を継続開催する。
- ⑤ 4月～3月 高校生・本学学生を対象とした「グローバルAPセミナー」、「ライティングセミナー」、「プレゼンテーションコンテスト」を実施する。
4月～3月 本事業実施に係る教務的措置の継続、例えば、ライティングセンターと授業の連動や高校生に対する開放、高校生対象大学教養レベルグローバル関連夏期集中科目等の開講を継続し、グローバル関連科目等の高校生へのオープン化を実施する。
- ⑥ 4月～3月 アドバンストプレイスメントの複数大学での実施のために他大学と大学間単位互換協定の拡充を図る。
- ⑦ 5月 教育成果測定に活用する「グローバルルーブリック」を、入試選抜方法としてどのように利用するかを公表する。
- ⑧ 5月～3月 グローバル人材育成連携協定新規締結の拡充を図る
- ⑨ 5月～7月 年次事業報告書(平成30年度分)の作成・印刷・送付を行い、事業の成果を広く公表する。
- ⑩ 5月 本学と連携高等学校合同による教員研修(FD)を実施する。
7月～9月 「大学教育再生加速プログラム(AP)推進委員会」にて平成30年度の事業について自己点検を行い、第三者評価委員会による点検・評価を受審し、事業終了後の計画の検討を行う。
- ⑪ 8月～3月 日英中トライリンガルキャンプ・英語キャンプの実施を通して、高校生へ学修機会を提供する。
- ⑫ 2月 IETLS対策講座を大学生と高校生に提供する。

**杏林大学 R1年度 テーマⅢ(高大接続)
事業の実施計画・実施内容・実績・成果**

補助事業の実績	補助事業に係る具体的な成果
<p>総論(補助対象期間中に行った事業の内容の概要を記載してください。また、必ず、交付申請時の実施計画の総論と対応させるように記載してください。)</p>	<p>(学生教育の観点での成果の概要を記載してください。また、必ず、左記の補助事業の内容と対応させるように記載してください。)</p>
<p>(1) 全体 本補助事業「日英中トライリンガル育成のための高大接続」は、文部科学省が指定したスーパーグローバルハイスクール(SGH)、SGHアンソニエイト、あるいは、指定されなかったがグローバル人材育成に積極的に取り組んでいる高等学校との有機的な高大接続を通して、より効率的かつ効果的にグローバル人材育成を加速することを目的としている。母語である日本語に加え、英語・中国語を操るトライリンガルになることは、「世界経済の中核を担っている英語圏・中国語圏に伍する日本社会の未来を築く」ため、そして、「地球上のより多くの人とコミュニケーションを通して世界の発展に寄与する」ために極めて有益であるという、本学のグローバル人材育成が抱えて立つ認識を高校生にも普及し、高校生・大学生という立場を超えて、ともにグローバル人材を目指す若者が協力し合いながら意欲・能力を涵養しうの一貫した取組を推進していく。その過程で、「大学による高等学校への学修機会の提供」に加え、本学が学生の成長を促す支援の一環として推奨してきた「ピアサポート」すなわち「大学生(留学生を含む)による高校生への学修機会の提供」も意欲的に実施し、「上級生が主体的に下級生に範を示すことによって自らの人格・能力を磨く」というピアサポートの風土の醸成をより一層加速させていく。高校生・大学生、さらには高等学校・大学の教職員が一体となった包括的高大接続を積極的に展開することにより、補助期間終了後も持続的かつ自立的に機能しうる体制の構築ならびにノウハウの集積を図る。本学は、理事長・学長の強いリーダーシップのもと、「グローバル人材育成」ならびに地域社会の知的基盤となるべく「社会変革のエンジンとなる大学」「地域から世界へ進化する大学」を目指している。本補助事業は、高大接続の観点から「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成」という社会の要請に着実に応える教育的基盤の整備・運用の実質化を試みるものであり、将来的には日本における高大接続のモデルケースとなるべく成果を広く波及させることも目指していく。</p> <p>(2) 本年度 本補助事業の本年度の目標は、井の頭キャンパスにおける高大接続の継続実施である。平成26年度より4年半をかけて堅調な軌道に乗り始めた「日英中トライリンガル育成のための高大接続」を推進するために、「大学教育再生加速プログラム(AP)推進委員会」(委員長:学長)・「高大接続推進室」・「ライティングセンター」の学内組織と、連携協定締結校(事業開始後、順天高校、関東国際高校、県立神奈川総合高校、都立武蔵村山高校、大成高校、日出学園高校、都立調布南高校の7校追加)をはじめとする高等学校との連携協議の場(「杏林APラウンドテーブル」)を有機的に機能させながら、平成28年度に開設した井の頭キャンパスにおいて、申請計画調書に記載したさまざまな高大接続事業を継続実施する。杏林APラウンドテーブルを継続開催し、そこから得られた協議結果を各事業内容に反映し、補助期間終了後の継続的実施も射程に入れながら、効果的な高大接続事業を進展させていく。また、平成29年度より実施し始めた「アドバンストブレイスメント」を本年度も継続実施し、意欲のある高校生に対する学修機会を積極的に提供していく。本学でアドバンストブレイスメントによって修得した単位を入学後に認定する「アドバンストブレイスメントによる大学間単位互換協定」を平成29年度には桜美林大学、共愛学園前橋国際大学、創価大学と締結したが、連携協定締結大学を増やし高大接続の制度普及を図る。早期留学を可能にするスーパーグローバルクラスの継続的運営、IELTS・TOEFL対策科目、高校生対象・大学教養レベルグローバル関連夏期集中科目の開講、トライリンガル育成のための英語・中国語教育の強化などの教務関連措置をとり事業進捗を図る。トライリンガルキャンプ、英語キャンプなどの「大学生(留学生を含む)による高校生への学修機会の提供」(ピアサポート)等の高大接続事業は継続し、本年度も高校生への学修機会提供を積極的に展開していく。また、高大接続、入試改革に資することを目的として開発を進めてきた、高校での教育成果測定のための「グローバルループリック」の運用については、平成30年度入試において事業取組学部である外国語学部では入試選抜方法へ導入したが、本年度も継続実施する。こうした補助事業開始後始めた高大接続事業の継続的運営と、一昨年度に新たに導入したアドバンストブレイスメント、ループリックの入試における利用を継続実施することによって、計画調書に記した高大接続構想が本格的に具現する見込みである。</p>	

杏林大学 R1年度 テーマⅢ(高大接続)
事業の実施計画・実施内容・実績・成果

<p>本事業最終年度となる令和元年度は、平成28年度井の頭キャンパス開設により本学の教育・研究機能が三鷹市に集約されたことを契機に改善されたキャンパスの立地条件を活かし高大連携・高大接続を加速させた。平成29年度より開始したアドバンス・プレイズメントを今年度も継続実施し、春学期・秋学期合計で事業取組学部である外国語学部の35科目だけでなく、医学部2科目、保健学部5科目、総合政策学部の16科目を含む58科目を対象科目として高校生に開放した。今年度も昨年度に引き続き夏期集中科目として保健学部4科目、総合政策学部1科目、外国語科目1科目を開講し、さらに英語キャンプ・中国語研修を加え、高校生履修登録者207名、高校生単位認定数231単位と目標値50名、100単位を大きく上回る実績となった。桜美林大学、共愛学園前橋国際大学、創価大学の3大学と「アドバンス・プレイズメントに関する単位互換協定」を締結し、本学入学志望の高校生だけでなく、修得した単位がより多くの大学で単位認定される高校生にとってより有益な制度構築を図るため、複数の大学に協定締結の働きかけをした。ライティングセンターの稼働を通じて学生の留学準備の補助機能を強化するとともに、各種学内イベントの高校生への開放や大学全体への事業の波及、それによる各学部教員と高等学校との連携機会の増加を通じて、大学の教育資源をさらに広範囲にわたって高校生に提供した。杏林APラウンドテーブルの継続的開催を通じ、本事業の取組に対する高等学校側からのフィードバックを得る機会を設け、教育効果の向上のための意見交換を定期的に実施した。学内では第三者評価委員会を開催することで、事業の目的・計画の妥当性や事業の進捗・達成状況の点検・評価を行い、課題を客観的な視点から分析し、各種事業の計画・実効性の改善を目指した。高校生への本学が有する教育資源の開放という観点から、「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏期集中講座」を実施し、さらに、各種教育イベントの提供という観点からは、高校生と大学生が共に学修する場である「IELTS対策講座」の継続実施に加え、昨年度に引き続き「英語プレゼンテーションコンテスト」「中国語カラオケ・吹替コンテスト」に高校生の参加を呼びかけ、目的を共有する者が集う場での集中特訓や能動的学修を通じて、高大の参加者に対し留学に向けた強い意識の醸成を促した。高大接続改革の入試改革として、学力の3要素のうち「主体性を持ち多様な人々と協働しつつ学習する態度」を多面的評価するために開発したルーブリックを、昨年度よりも利用範囲を広め、令和2年度外国語学部AO入試で選抜方法の一部として使用した。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・全学的アドバンス・プレイズメントによって、高校生に対して大学入学前に様々な学問分野での大学教養レベルの教育を受ける機会が与えられ、医学部、保健学部、総合政策学部、外国語学部の大学生と共に学ぶことができるようになった。 ・夏期集中科目と英語キャンプ・中国語研修を実施することによって、高校生が履修しやすい環境が整い、207名の高校生が履修登録をし、231単位をアドバンス・プレイズメントで単位認定した。 ・桜美林大学、共愛学園前橋国際大学、創価大学の3大学と「アドバンス・プレイズメントに関する単位互換協定」の締結を維持したことによって、本学入学志望の高校生だけでなく、修得した単位がより多くの大学で単位認定される、高校生にとってより有益な制度となった。 ・ピアチューターならびに英語授業担当者の協力を得てライティングセンターの周知を徹底したことで、利用者数・利用回数・稼働率を維持し、留学準備の補助に大きく貢献した。 ・ライティングセンター主催の各種セミナーを通じて、高校生と大学生が共に学びあうことによって、高大接続した形でグローバル人材に成長しようとする意識の醸成と具体的技術・能力向上が図られた。 ・全学的波及を通じ、外国語学部以外の教員と高校との連携機会が増加したことで、高校生が語学以外の分野でも「グローバル人材」として身に付けるべき素養や知識について大学の教育資源を活用できるようになった。 ・杏林APラウンドテーブルを通じて、大学教職員と高校教職員がグローバル人材育成の課題や高大接続改革への対応状況についての意見交換を行い、大学生・高校生の学びの質の向上に繋げた。 ・「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏期集中講座」の開講や「グローバル関連科目」「COC関連科目」の高校生への開放を通じて、大学レベルの講義に高校生と大学生が共に参加し、高い意識を共有する高大の学習者が互いに刺激を与えつつ能動的学修に従事する理想的な学びの場が実現した。 ・「英語キャンプ」「IELTS対策講座」等に加え「英語プレゼンテーションコンテスト」「中国語カラオケ・吹替コンテスト」を高校生に開放したことで、国際的な活躍を志す高大の学習者が互いに刺激を与えつつ学ぶ理想的な環境が実現した。 ・学力の3要素のうち、知識・技能、思考力・判断力・表現力などの試験・テストで測ることができる力とは異なり、主体性・多様性・協働性という様々な経験によって身に着けた能力を評価測定するルーブリックが入学試験の一部として使用されることにより、授業及び高等学校が行事として指定している経験だけでなく、学校が指定していない留学・海外研修、ボランティア、資格・検定試験、コンテストなどの学外での自主的な経験によって習得した能力が多面的に評価され、大学に進学してそれらの生きる力を伸ばそうとするきっかけが得られた。
<p>(補助対象期間中に行った事業の内容を具体的に記載してください。また、必ず、交付申請時の実施計画と対応させるよう、箇条書きで記載してください。)</p>	<p>(学生教育の観点での成果を記載してください。また、必ず、左記の補助事業の内容と対応させるよう、箇条書きで記載してください。)</p>
<p>① 4月 アドバンス・プレイズメントを継続実施する。夏期集中科目によるアドバンス・プレイズメントも実施する。</p> <p>平成29年度までに締結した大成高校、順天高校(SGH指定校)、神奈川総合高校、関東国際高校、聖徳学園高校、武蔵村山高校、調布南高校、府中東高校、藤村女子高校の9高校と「アドバンス・プレイズメントに関する覚書」を継続維持し、学則・規定等を整え、本年度は医学部2科目、保健学部5科目、総合政策学部16科目、外国語学部35科目の春学期・秋学期合計58科目を対象科目としてアドバンス・プレイズメントを継続実施した。</p> <p>夏期集中科目としての開講も本年度も継続し、保健学部4科目(基礎生物学・基礎化学・基礎物理学・基礎数学)、総合政策学部1科目(近現代史と現代社会)、外国語学部1科目(目的別英語演習)を開講した。本年度中にアドバンス・プレイズメントで単位認定を受けた高校生は合計207名、認定された単位数は231単位となり、目標値50名、100単位を大きく上回る結果となった。</p> <p>桜美林大学、共愛学園前橋国際大学、創価大学の3大学と「アドバンス・プレイズメントに関する単位互換協定」を締結し、本学入学志望の高校生だけを対象にせず、制度本来の意義を踏まえ、修得した単位がより多くの大学で単位認定される高校生にとってより有益な制度構築を図り、本年度は複数の大学に働きかけを行っているが、先方の大学から正式な協定締結の回答を待っている状況である。</p>	<p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全学的アドバンス・プレイズメントによって、大学入学前に様々な学問分野での大学教養レベルの教育を受ける機会が与えられ、医学部、保健学部、総合政策学部、外国語学部の大学生と共に学ぶことができるようになった。これは高校生にとって自分の進路を決めるきっかけとなるだけでなく、大学進学後に修得すべき単位が先取りできるようになり、大学での学修がより深く実質的なものに行えるようになった。 さらには将来的には本事業の目的でもあるグローバル人材育成のための留学の早期化・長期化にもつながることになる。 ・春学期・秋学期の正規開講科目をアドバンス・プレイズメントの対象科目として開放しているが、高校生の高校での授業時間割の自由度が低く、通常科目を履修しづらい状況にあるため、今年度も夏期集中科目を8月19日から30日の間に開講したところ、多くの高校生が履修登録をし、単位認定された。 ・桜美林大学、共愛学園前橋国際大学、創価大学の3大学と「アドバンス・プレイズメントに関する単位互換協定」の締結を維持したことによって、本学入学志望の高校生だけでなく、アドバンス・プレイズメントによって修得した単位がより多くの大学で単位認定される、高校生にとってより有益な制度となった。

杏林大学 R1年度 テーマⅢ(高大接続)
事業の実施計画・実施内容・実績・成果

<p>② 4月～3月 井の頭キャンパスでのライティングセンターの運営を継続し、留学に向けたサポート体制を強化させる。</p> <p>ライティングセンターが本年度も継続的に稼働し、ジェイソン・サマービル特任講師によるワークショップで訓練を受けた大学生がピアチューターとして、大学生ならびに高校生の英語ライティングをサポートしてきた。</p> <p>ライティングセンターと授業の連動に関して、本年度も継続して、特に外国語学部設置科目の中でライティングを扱う科目の科目担当者に、授業の中でライティングセンターの積極的利用を学生に奨励することと、授業の課題作成補助としてライティングセンターの利用斡旋を依頼した。</p> <p>2019年6月8日、高校生対象英検対策ライティングセミナーが開催され、4名の高校生が参加した。</p> <p>本学のオープンキャンパスで高校生対象ライティングセミナーがライティングセンターで開催され、6月15日に15名、7月27日は33名、8月17日は24名、合計72名の高校生がライティングセンターで特任講師・大学生ピアチューターのライティング指導を受けた。</p> <p>在学生のライティングセンター利用者数は、年間稼働月数7カ月として1カ月平均131名に上り、目標値である120名を上回った。</p> <p>2019年9月～2020年3月 令和2年度のピアチューターの募集を開始し、書類審査ならびに面接を行って、候補者を決定した。内定した候補者はライティングセンターの活動を見学し、次年度のセンター運営の準備を始めた。</p>	<p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特任講師ならびにピアチューターから個別の指導を受けることで、訪問した学生は英語における自身の長所と短所を見極めることができ、英語ライティング学習に対するより積極的な姿勢が生まれた。 ・ライティングセンターのスタッフと英語授業を担当する教員たちの間で協力、調整が行われたことで、指導を受けた学生は英語授業とライティングセンターの活動が相補的であるという認識を強くし、英語ライティング力向上に向けてさらに意欲を高めることとなった。また、継続してライティングセンターの活用を促したことで、ライティングセンターを訪れた学生数・実施した個人チューターセッション回数ともに、センターの稼働率を高水準で維持することに成功した。 ・ライティングセンターの在学生利用者数は年間917名にのぼり、実質稼働月数7カ月として月平均131名が利用した。高校生利用者数は年間76名にのぼり、目標値の40名を大きく上回った。 ・ピアチューター主導のレビューレッスンは、大学生のみならず、セミナーやオープンキャンパスで大学を訪れていた高校生にも開放され、高校生が語学学習の意欲を高める契機となった。 ・「ライティングセミナー」では、参加高校生はピアチューターから個別指導を受けることで客観的に自身のライティングを見つめなおす機会を得た。また、ピアチューターとして参加した大学生側も国際的な諸問題に高い関心を持つ高校生に刺激を受けつつ、ディスカッションを通じ、ライティングの基本を改めて確認するとともに指導に対するさらなる自信を深めた。 ・グローバル人材育成が外国語学部だけではなく全学的に波及し、海外研修や留学に参加する学生が保健学部・医学部・総合政策学部でも増加してきている。ライティングセンターで海外研修や留学の事前研修を受けることによって、留学先での学習にスムーズに入れるようにすることで、グローバル人材育成を加速させることができた。 ・事業終了後の2020年度に向けて早期より次年度ピアチューターの募集、採用活動を行ったことで、次年度への引継ぎがスムーズとなり、本事業におけるライティングセンターが果たしてきた活動を停滞させることなくそのまま維持することが可能となる。
<p>③ 4月～3月 特設サイトの運営・更新による事業公開を推進し、学内外への事業の周知・波及を図る。10月(予定)に幹事校の主催するシンポジウム・ポスターセッションに参加する。5月に関西学院大学で開催される全国大学入学者選抜研究連絡協議会(入選研)に参加し高大接続改革の情報収集を行う。</p> <p>4月～3月 特設サイトを通じて、杏林APラウンドテーブルなどの大学と高等学校の会合、ライティングセンターの活動や、高校生にも開放した「英語キャンプ」、「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏期集中講座」、「英語プレゼンテーションコンテスト」、「中国語カラオケ・吹替大会」、「IELTS対策講座」などの教育的イベント、高等学校教員と大学教員の教育に関する情報交換を目的とした「高校と大学をつなぐFD/SD」、高校生と大学生の交流・協働学修をテーマとした「日英中トライリンガルキャンプ」などの活動について、継続的に発信を行った。</p> <p>4月～3月 医学部・保健学部・総合政策学部・外国語学部の教員による高校生への特別指導や高等学校訪問講義についても継続的に発信し、大学全体としての取組の実績を強調した。</p> <p>10月26日、AP事業テーマⅢ「入試改革・高大接続」採択校合同シンポジウムが、「AP東京八重洲通り」を会場にして、大学、高校、予備校の関係者やその他入試改革、高大接続に関心のある97名の参加者を迎え開催された。例年、全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会と合わせ、APポスターセッションとして開催されていたが、今年度は、幹事校である東京農工大学が主導でテーマⅢに採択されている8大学が一同に会し、文部科学省高等教育局専門官からの講演とともに、各大学の取り組みを口頭発表とポスターセッションにより報告する機会となった。本学からは、外国語学部長、高大接続推進室長、国際交流センター長と、2名の高大接続推進担当職員が出席し、本学のアドバンストプレイズメントの実施状況など、これまでのAP事業の取り組みについて、坂本学部長が発表を行い、ポスターセッションのブースでは教職員が個々に説明を行い広報活動に取り組んだ。</p>	<p>③</p> <ul style="list-style-type: none"> ・5月20日に実施した「第6回高校と大学をつなぐFD/SD」では、高校関係者15校から23名、杏林大学からは19名の教職員が参加し、順天中学校・高等学校 長塚篤夫校長を講師に迎え、「高等学校からの主体性評価への期待～ePFと電子調査書の課題～」と題した講演後、参加者との活発な議論が交わされ、今後の高大接続の進展に向けた教職員の意識改革となった。 ・8月5日・6日に実施した「英語キャンプ」では、57名の参加申し込みがあったが、当日欠席者が13名で、参加者数は44名となった。3名のネイティブ講師が高校生・大学生の指導に当たり、英語の集中特訓に取り組み、英語によるコミュニケーション能力が向上した。 ・8月26日・27日の2日間、夏期集中大学教養レベル・グローバル関連科目「杏林ガイゴ・ライブラリー(科目A(中国語)、B(英語))」が開講され、高校生10名、大学生3名、合計13名が受講し、「グローバル化」というテーマのもとプロジェクト学習に取り組み、英語または中国語でプレゼンテーションを行い、外国語による情報発信力の向上につながった。 ・8月29日・30日の2日間、夏期集中大学教養レベル・グローバル関連科目「英語と日本語で学ぶ『社会のしくみ』入門(科目C(総合政策学部))」が開講され、高校生6名、大学生22名、合計28名が受講した。授業は英語での解説が取り入れられ、受講生は英語情報収集能力の向上につながった。 ・10月19日、英語プレゼンテーションコンテストが開催された。3つの高校(都立杉並総合高校、県立大和西高校、県立相模原高校)から、高校生の個人3名と杏林大学生4名の7名によりプレゼンテーションを競い合った。高校からの引率教員ら4名も聴衆として参加し、国際的な活躍に向け高い意識を共有する高大の学習者が互いに刺激を与えつつ学びに従事する理想的な環境が実現した。 ・10月16日、外国語学部中国語学科の教員と学生、関東国際高校の生徒2名が参加して、中国語カラオケ・朗読・吹替え大会を開催した。高校生と大学生が、中国語でカラオケを歌ったり、漢詩の朗読、映画の吹き替えをして日頃の練習の成果を発表し、聴衆も含め約80名の参加者が会場に詰めかけ、充実した学修機会となった。 ・11月16日・30日に実施した「IELTS対策講座」では、5名の杏林大学生に高校生23名が加わり、留学に向けて高い意識を共有する高大の学習者が互いに刺激を与えつつ学びに従事する理想的な環境が実現した。 ・3月21日・22日に開催予定であった「日英中トライリンガルキャンプ」は、新型コロナウイルス感染拡大防止のためやむを得ず中止とした。参加を申し込み楽しみにしていた高校生29名に対しては、本学から代替課題を郵送し、英語運用能力の向上を図った。 ・総合政策学部、外国語学部教員による順天高校での講演、医学部代謝生化学教室教員による聖徳学園高校の生徒の指導、保健学部看護学科学科看護学研究室教員による聖徳学園高校の心の健康づくりボランティア支援、国際交流センター長の関東国際高校・順天高校・神奈川総合高校でのグローバル関連イベントへの参加など、全学的に個別教員と高等学校との連携が継続的に行われており、大学の持つ教育資源をより広範囲にわたって高校側に提供することができている。

杏林大学 R1年度 テーマⅢ(高大接続)
事業の実施計画・実施内容・実績・成果

<p>④ 4月～3月 大学教育再生加速プログラム(AP)推進委員会、高大接続推進室、ライティングセンターとの連動を継続し、他学部への事業拡大を継続する。</p> <p>4月～3月 AP推進委員会、高大接続推進委員会、高大接続推進室、ライティングセンターとの連動を継続し、2委員会と2組織の情報共有の促進、協力体制の強化、プログラムの調整をより綿密に行ったことに加え、キャンパス移転を通じて4学部のスムーズな連携が可能になったことで、AP補助事業の全学的な波及に結びついた。</p>	<p>④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本補助事業で定期的に行っている事業項目以外にも、総合政策学部教員による順天高等学校での講演、医学部代謝生化学教室教員による聖徳学園高等学校の生徒の指導、保健学部看護学科学校看護学研究室教員による聖徳学園高等学校の心の健康ボランティアの支援、さらに、「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏期集中講座」における総合政策学部教員の担当科目の開講など、他学部教員と高校との連携機会の拡大にも結びつき、より多くの学修機会を高校生に提供できている。 ・アドバンスト・プレイズメントの実施にあたり、AP推進委員会の委員長でもある学長の指揮のもと、全学的に夏期集中アドバンスト・プレイズメント科目6科目を開講したことは、学長のガバナンスが発揮された証左である。
<p>⑤ 4月～3月 グローバル人材育成取組校等との「杏林APラウンドテーブル」を継続開催する。</p> <p>5月20日 第14回杏林APラウンドテーブルを杏林大学井の頭キャンパスで開催し、大成高等学校、関東国際高等学校、聖徳学園高等学校、順天高等学校、都立三鷹中等教育学校、都立青梅総合高等学校、日出国園高等学校、都立羽村高等学校、藤村女子高等学校、都立府中東高等学校、都立調布南高等学校、都立杉並総合高等学校、神奈川県立横浜清陵高等学校、工学院大学附属高等学校、都立東大和高等学校(初参加)の15校23名が参加して、杏林大学の教職員19名と活発な意見交換を行った。</p> <p>11月18日 第15回杏林APラウンドテーブルを杏林大学井の頭キャンパスで開催し、順天高等学校、関東国際高等学校、聖徳学園高等学校、都立青梅総合高等学校、大成高等学校、都立武蔵村山高等学校、日出国園高等学校、都立調布南高等学校、都立東大和高等学校、都立羽村高等学校、都立杉並総合高等学校、工学院大学附属高等学校、神奈川県立神奈川総合高等学校、神奈川県立横浜青陵高等学校に加え、都立昭和高等学校(初参加)、神奈川県立相模原高等学校(初参加)の16校23名が参加して、杏林大学の教職員15名と活発な意見交換を行った。</p>	<p>⑤</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第14回杏林APラウンドテーブルにおいては、今年度予定されているライティングセミナー、英語キャンプと中国語研修、夏期集中アドバンストプレイズメントなどの案内を行った後、第6回高校と大学をつなぐFD/SDを開催した。順天中学校・高等学校 長塚篤夫校長に「高等学校からの主体性評価への期待～ePFと電子調査書の課題～」と題して講演いただき、文部科学省「高大接続システム改革会議」の委員を務めておられた経験に基づき、学力の3要素における主体性評価、大学入試における主体性評価、資質・能力としての主体性評価、さらにe-ポートフォリオと電子調査書の課題について詳細な説明を受けた後、活発な質疑応答が行われた。さらに、「主体性評価の観点から杏林大学の入試でルーブリックを用いているのは非常に良い。受験する生徒に対し学びの資質を引き出していくことにつながっているため、将来的に他大学も進めてほしい」との高評価を得た。 ・第15回杏林APラウンドテーブルにおいては、10月に開催された中国語カラオケ・朗読大会、英語プレゼンテーション大会の様相(録画)を高校関係者に見ていただいた後、今年度の英語キャンプ、中国語研修、アドバンストプレイズメント(夏期集中科目等)、ライティングセミナーなどの活動について報告を行った。その後、意見交換に入り、今年度から高校教育で新科目となった「探究」に関する話題が提供され、各高校側の状況報告とともに、入試改革と共に変容しつつある大学入学生に対応する大学教育を考える機会となった。また、本学のAP事業終了後の継続すべき取り組みなどについて意見聴取した。高校側から「大学が中心となり高校関係者と一緒に会して情報交換する場を持つことは他にない取り組みなのでぜひ継続して欲しい」「最近増加傾向にある中国からの入学者に課題もあるので、中国語・英語のことで力添えをいただきたい」「大学教員に高等学校へ出向いていただいて講義をしてもらう機会は非常にありがたい」などの意見をいただき、次年度以降の補助事業終了後の事業継続に参考となる意見交換の場となった。

杏林大学 R1年度 テーマⅢ(高大接続)
事業の実施計画・実施内容・実績・成果

<p>⑥ 4月～3月 高校生・本学学生を対象とした「グローバルAPセミナー」、「ライティングセミナー」、「プレゼンテーションコンテスト」を実施する。</p> <p>5月25日、順天高校において、グローバルAPセミナーとして外国語学部長が講演を行った。高校関係者93名(保護者83名、教員10名)が参加した。</p> <p>5月28日、井の頭キャンパスにおいて、高校教員対象大学説明会が開催され、出席した高校教員106名に対し、高大接続推進室長が、本学の文科省補助事業「大学教育再生加速プログラム～テーマⅢ(高大接続)」について、一連の事業内容を説明した。</p> <p>7月6日、聖徳学園高校において海外大学進学説明会が開催され、国際交流センター長が、約30名の高校生と保護者に対し、本学のアドバンストブレイスメントについて説明を行った。</p> <p>11月26日、聖徳学園高校のグローバルデーにおいて、国際交流センター長が特別授業を実施した。高校生33名が参加した。</p> <p>10月28日、順天高校のグローバルウィークにおいて、国際交流センター長が特別授業を実施した。高校生10名とアメリカ人教員1名が参加した。</p> <p>10月30日、順天高校のグローバルウィークにおいて、外国語学部特任講師が特別授業を実施した。高校生13名と教員3名が参加した。</p> <p>12月8日、県立神奈川総合高校において、ワールド・カフェにおいて、国際交流センター長が基調講演を行った。神奈川県内の17高校の生徒155名が参加した。</p> <p>6月8日、ライティングセンターにおいて高校生対象英検対策ライティングセミナーが開催され、4名の高校生が参加した。</p> <p>7月27日、本学のオープンキャンパスで高校生対象ライティングセミナーがライティングセンターにおいて開催され、33名の高校生がライティングセンターで特任講師・大学生ピアチューターのライティング指導を受けた。</p> <p>8月17日、本学のオープンキャンパスで高校生対象ライティングセミナーがライティングセンターにおいて開催され、39名の高校生がライティングセンターで特任講師・大学生ピアチューターのライティング指導を受けた。</p> <p>10月6日、英語プレゼンテーションコンテストが開催された。本コンテストは、毎年杏園祭(学園祭)の中で実施されていたが、台風襲来により杏園祭が急遽中止となったため、日程を1週間延期して実施した。高校生3名と杏林大学生4名の7名によりプレゼンテーションを競い合った。高校からの引率教員ら4名も聴衆として参加した。</p> <p>10月16日、外国語学部中国語学科の教員と学生、関東国際高校の生徒2名が参加して、中国語カラオケ・朗読・吹替え大会を開催した。聴衆も含め約80名が参加した。</p>	<p>⑥ 順天高校におけるグローバルAPセミナーでは、「グローバルに活躍することの素晴らしさ」と題した講演で、講師自身の留学体験なども踏まえ、留学経験は必ず視野が広がること、学力ではなく最終的には人間力が大切であることなどを、聴衆に向けて発信した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本学の高校教員対象大学説明会においては、本学の「日英中トライリンガル育成のための高大接続」という取組の事業内容を紹介し、高校生を対象にしたアドバンストブレイスメント夏期集中講座や大学教養レベルグローバル関連科目夏期集中講座の周知徹底を図り、参加者の増大につながった。 ・聖徳学園高校における海外大学進学説明会においては、本学で導入しているアドバンストブレイスメントを紹介することによって、高校生が大学における教育機会を得ることができるという事実認識を深める機会となった。 ・聖徳学園高校のグローバルデーにおける特別授業では、“The Man Who Made the First English-English Study Dictionary”というタイトルで講演が行われ、高校生は最初の英英学習辞典を作った人が戦前大分商業高等専門学校にいたA.S.Hornbyであり、日本での発明だったことを知って関心を持ち、異文化体験の重要性を認識した。 ・順天高校主催のグローバルウィークは、先方がSGH、本学がAPで採択されて以来、全面協力して開催される行事であるが、今年度も本学から2名の教員を派遣してグローバル人材育成を支援することができた。国際交流センター長は“The Man Who Made the First English-English Study Dictionary”、外国語学部特任講師は“Student interaction in English using smartphone apps”というテーマでワークショップを行い、高等教育における教育機会を高校生に提供することができた。 ・神奈川総合高校主催のワールド・カフェは、県内の17高校の生徒155名が参加した大規模なイベントで、本学国際交流センター長が出席し、基調講演とフィードバックを行い、高校生の英語によるコミュニケーション能力が向上した。 <p>・「ライティングセミナー」では、参加高校生はピアチューターから個別指導を受けることで客観的に自身のライティングを見つめなおす機会を得た。また、ピアチューターとして参加した大学生側も国際的な諸問題に高い関心を持つ高校生に刺激を受けつつ、ディスカッションを通じ、ライティングの基本を改めて確認するとともに指導に対するさらなる自信を深めた。また、英語での情報発信力を向上させることを目的とした取組によって、現代社会における英語での情報発信力の必要性が認識され、国際舞台で活躍を志す学生に刺激を与えることができた。</p> <p>・「英語プレゼンテーションコンテスト」「中国語カラオケ・朗読・吹替え大会」では、国際的な活躍に向け高い意識を共有する高大の学習者が互いに刺激を与えつつ学びに従事する理想的な環境が実現した。</p>
<p>⑦ 4月～3月 本事業実施に係る教務的措置の継続、例えば、ライティングセンターと授業の連動や高校生に対する開放、高校生対象大学教養レベルグローバル関連夏期集中科目等の開講を継続し、グローバル関連科目等の高校生へのオープン化を実施する。</p> <p>大学教養レベルグローバル関連夏期集中科目を本年度は下記3科目を高校生に開放。総計で高校生16名、大学生25名が履修した。</p> <p>8月26日、27日、夏期集中大学教養レベル グローバル関連科目「杏林ガイゴ・ライブラリー(科目A(中国語)、B(英語))」(外国語学部)が開講され、高校生10名(うち科目A4名、科目B6名)、大学生(総合政策学部)3名(全て科目B)、合計13名が受講した。</p> <p>8月29日、30日、夏期集中大学教養レベル グローバル関連科目「英語と日本語で学ぶ『社会のしくみ』入門」(科目C(総合政策学部))が開講され、高校生6名、大学生(総合政策学部、外国語学部)22名、合計28名が受講した。</p> <p>8月19日～22日、高校生対象の夏期集中アドバンストブレイスメント科目を開講した。</p> <p>科目Aは「近現代史と現代社会」(総合政策学部)、科目B:基礎生物学、科目C:基礎化学、科目D:基礎物理学、科目E:基礎数学(以上、保健学部)、科目F:目的別英語演習(外国語学部)が開講され、科目B,C,D,Eは3日間連続、科目A,Fは4日間連続で、高校生が大学レベルの授業を受けた。高校生の履修終了者数は、科目A(6名)、科目B(29名)、科目C(9名)、科目D(2名)、科目E(26名)、科目F(18名)と合計90名の意欲的な生徒が参加した。</p> <p>4月～3月 グローバル関連科目40科目、COC関連科目11科目を開講し、高校生にも開放した。学期中の高校生履修者はなく、在学生履修者はそれぞれ、延べで2,914名、1,029名に上った。</p>	<p>⑦ 「杏林ガイゴ・ライブラリー」では、「グローバル化とその先へ」の講義を受講後、個々に外国語学部の専任教員の研究室を訪問し、事前に与えられたテーマ(「グローバル化」)に添って専門分野の話を開いて回り、予め用意した質問を教員に向けた。2日目は、午前中「プロジェクト学習」の手法を応用した受講生同士による議論、発表準備に時間を費やし、午後の最初の時間で、協同作成したパワーポイントの資料の再確認を行った後、班ごとにプレゼンテーションを行った。科目A受講者は簡単な中国語を交えて発表し、科目B受講者は全員英語でプレゼンを行い、外国語によるプレゼンテーション能力が向上した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「英語と日本語で学ぶ『社会のしくみ』入門」では、社会科学系の学問への入門として、英語と日本語を通して、グローバルに見る視点の素地を身に付ける機会となった。 <p>・高校生対象夏期集中アドバンストブレイスメント科目では、いずれも教養レベルの科目でありながら、高校での授業とは異なる大学レベルの教育機会を提供する場となった。</p> <p>・多くの在学生がグローバル関連科目やCOC関連科目で学修することによって、杏林大学の目指すグローバル人材育成と地域指向の双方の視点から、さまざまな学修内容を多角的に学ぶ機会となった。</p>

杏林大学 R1年度 テーマⅢ(高大接続)
事業の実施計画・実施内容・実績・成果

<p>⑧ 4月～3月 アドバンストブレイスメントの複数大学での実施のために他大学と大学間単位互換協定の拡充を図る。</p> <p>2017年3月に桜美林大学、5月に共愛学園前橋国際大学、9月に創価大学と「アドバンストブレイスメントに関する単位互換協定」を締結し、以後この連携4大学でアドバンスト・ブレイスメントの単位互換を実施していくことになった。</p> <p>2019年度も複数の大学に働きかけを継続して行っており、11月8日、国際交流センター長と地域交流課高大接続推進担当の職員1名が、本学と同じAP事業に採択された愛媛大学と大とキャンパスが隣接する松山大学を訪問し、情報交換・連携協定締結のための働きかけを行った。</p>	<p>⑧ ・桜美林大学、共愛学園前橋国際大学、創価大学の3大学と「アドバンスト・ブレイスメントに関する単位互換協定」を締結したことによって、本学入学志望の高校生だけでなく、アドバンスト・ブレイスメントによって修得した単位がより多くの大学で単位認定される、高校生にとってより有益な制度となった。</p>
<p>⑨ 5月 教育成果測定に活用する「グローバルルーブリック」を、入試選抜方法としてどのように利用するかを公表する。</p> <p>2019年5月 昨年度に引き続き、学力の3要素のうちの一つ「主体性も持って多様な人々と協働して学ぶ力」と、「課題発見とその解決をする力」および「語学力(話す力(対話力+プレゼンテーション力)、聞く力、書く力、読む力)」に関するルーブリックを作成し、HP上で公開。同時に、令和2年度外国語学部AO入試でルーブリック・小論文による事前資格審査、事前課題・面接によって選考を行うことを公表した。</p>	<p>⑨ ・学力の3要素のうち、知識・技能、思考力・判断力・表現力などの試験・テストで測ることができる力とは異なり、主体性・多様性・協働性という様々な経験によって身に付けた能力を評価測定するルーブリックが入学試験の一部として使用されることにより、授業及び高等学校が行事として指定している経験だけでなく、学校が指定していない留学・海外研修、ボランティア、資格・検定試験、コンテストなどの学外での自主的な経験によって習得した能力が多面的に評価され、それらの「生きる力」を伸ばすために大学進学を目指す高校生を選抜する入試が実施された。</p>
<p>⑩ 5月～3月 グローバル人材育成連携協定新規締結の拡充を図る</p> <p>2018年11月14日、都立調布南高校と高大連携協定を締結して、目標値の10校を達成している状況の中、本年度も継続して新規締結校を探している。</p>	<p>⑩ ・連携協定では、「杏林大学と当該高等学校が、相互の教育に係る交流・連携を通じて、高校生の視野を広げ、進路に対する意識や学習意欲を高めるとともに、大学の求める学生像及び教育内容への理解を深め、かつ高校教育・大学教育の活性化を図るために、次のとおり協定を締結する」とし、以下の活動に取り組んでいくことにしている。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1)大学の授業科目への特別聴講生の受け入れ (2)大学の各種公開講座への聴講生の受け入れ (3)大学教員による高校への出張講義 (4)教育についての情報交換及び交流 (5)その他、双方が協議し同意した事項
<p>⑪ 5月～7月 年次事業報告書(平成30年度分)の作成・印刷・送付を行い、事業の成果を広く公表する。</p> <p>5月～7月 事業報告書(平成30年度分)が完成し、特設サイトで公開するとともに、外国語学部・総合政策学部の全専任教員、医学部・保健学部の全教授に1部ずつ配布した。また、連携高等学校、愛知県から北海道までのSGH校、AP事業採択大学に送付した。</p>	<p>⑪ ・広く杏林大学のAP事業の取組を大学の内外に周知することで、学内では、外国語学部だけでなく、医学部・保健学部・総合政策学部の教員による高校生への特別指導や高等学校訪問講義などが継続して行われていることについて情報共有がなされると同時に、杏林大学の本事業の取組の学外での認知度も大いに向上した。</p>

杏林大学 R1年度 テーマⅢ(高大接続)
事業の実施計画・実施内容・実績・成果

<p>⑫ 5月 本学と連携高等学校合同による教員研修(FD)を実施する。</p> <p>5月20日、第14回杏林APラウンドテーブルと同日開催で、第6回高校と大学をつなぐFD/SDを、杏林大学井の頭キャンパスで開催した。高校側からは15校から23名の校長、副校長、進路指導部担当教諭らが参加し、杏林大学からは19名の関係教職員が参加した。参加高校は大成高等学校、関東国際高等学校、聖徳学園高等学校、順天高等学校、都立三鷹中等教育学校、都立青梅総合高等学校、日出学園高等学校、都立羽村高等学校、藤村女子高等学校、都立府中東高等学校、都立調布南高等学校、都立杉並総合高等学校、神奈川県立横浜清陵高等学校、工学院大学附属高等学校、都立東大和高等学校(初参加)であった。</p>	<p>⑫ ・今年度の高校と大学をつなぐFD/SDは、順天中学校・高等学校 長塚篤夫校長を講師に迎え、「高等学校からの主体性評価への期待～ePFと電子調査書の課題～」と題して講演いただいた。長塚校長は文部科学省「高大接続システム改革会議」の委員を務めた経験に基づき、学力の3要素における主体性評価、大学入試における主体性評価、資質・能力としての主体性評価、さらにe-ポートフォリオと電子調査書の課題について講演された。</p> <p>高等学校教育を通じて身に付けさせる力(確かな学力、豊かな心、健やかな体)の中で客観的に評価しにくいものを高校生が取り組む様々な活動を通して、主体性などの評価をしていけばいいのではないかと議論が進み、入試制度の総合型選抜は生徒の主体性も見る方法になっており、主体性等の選抜における重みをつけるのであれば大学側もアドミッションオフィスなどの体制を整え充実させる必要があるだろうと指摘された。また、新学習指導要領では学力3要素に対応した資質・能力の育成と評価充実が図られることになり、特に高校では探究学習が充実し、主体的な学びが進められることとなった。大学側でその部分を評価してくれないと生徒が主体的に学ぼうとしている点が見えないだろうと指摘。資質・能力としての主体性を評価するには、パフォーマンス、ポートフォリオなどについてはルーブリック基準で評価することが不可欠である。主体性評価を推進する上では、Web出願やe-ポートフォリオ、調査書の電子化するのがよいとの意見が出ている。杏林大学の入試でルーブリックを示しているのは非常に良い。受験する生徒に対し学びの資質を引き出していくことにつながっているので、将来的に他大学も進めてほしいと本学の取組を評価された。参加した高校関係者・大学関係者は、高大接続改革・入試改革の動向に関する情報収集、改革の主旨を理解する良い機会となった。</p>
<p>⑬ 7月～9月 「大学教育再生加速プログラム(AP)推進委員会」にて平成30年度の事業について自己点検を行い、第三者評価委員会による点検・評価を受審し、事業終了後の計画の検討を行う。</p> <p>9月28日 杏林大学井の頭キャンパスにおいて、第三者評価委員会が開催された。外部評価委員として、中学・高等学校の校長(高校教育全般)、大学教授(英語関係)、高校教諭(中国語関係)の3名の委員を招き、本学からは、学長、国際交流センター長、高大接続推進室長、井の頭事務部副部長、地域交流課長が出席した。</p> <p>10月 AP推進委員会にて第三者評価書が共有され、外部評価委員より受けた指摘や批判に基づき、具体的な改善案の検討が行われた。</p>	<p>⑬ ・「毎年度、杏林APラウンドテーブルやアドバンストプレイズメント、日英中トライリンガルキャンプなど継続的に取り組み、その取り組みが広がっていることは評価できる」、「ルーブリックの入試への活用や、アドバンストプレイズメントの実施において夏期集中講座に切り替えるなど、高校生がより参加しやすい運営に切り替えた点は素晴らしい」など、概ね高い評価を受けた。</p> <p>・「これからの教育は一方的な教科書だけの授業ではなく、PBLなど双方向授業を実践していく必要がある」、「大学や企業等、横の広がりを展開するなど知の結集をしていかなくてはいけない」、「英語キャンプ、日英中トライリンガルキャンプ、英語プレゼンテーションコンテストなどの興味深い取り組みに関連高校教員の見学を取り入れてみてはどうか」「アドバンストプレイズメントに関する単位互換協定を今後もより多くの大学の参加・拡充に向けてコアとなることを期待する」などといった意見を受け、指摘された課題について今後検討していく良い機会となった。</p>
<p>⑭ 8月～3月 日英中トライリンガルキャンプ・英語キャンプの実施を通して、高校生へ学修機会を提供する。</p> <p>8月5日、6日、杏林大学井の頭キャンパスにおいて英語キャンプを実施。48名の大学生と9名の高校生、目標値50名を超える合計57名の参加申し込みがあったが、当日欠席者が多発し、実際の参加者は44名(大学生36名、高校生8名)となった。</p> <p>3月21日、22日の1泊2日で、「日英中トライリンガルキャンプ」を多摩永山情報教育センターにおいて実施予定で、本学在学学生11名(チューターとして参加、うち2名は留学生)、本学教職員6名、高校生29名、高校教員2名が参加して、大学生や中国からの留学生とともに協働学修、アクティブラーニングに取り組む予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で開催をやむなく中止した。参加予定であった高校生に対しては、代替措置として本学から学習課題を郵送した。</p>	<p>⑭ ・「英語キャンプ」では、ネイティブ教員主導の下、日本語を一切使用しない環境の中で、高い意識を共有する高大の学習者が互いに刺激を与えつつ異文化理解を深めると同時に、英語でのコミュニケーション能力が向上した。</p> <p>・「日英中トライリンガルキャンプ」では、「グローバル人材育成」というテーマのもと、中国語や英語を用いた活動に従事する予定であった。高校生ならびに大学生が国際語としての英語・中国語を活用しながら、グループワークを行い、2日目にはコンテスト形式で、グループワークの成果を、日本語、英語、中国語の3か国語を用いてプレゼンテーションを行う予定であった。トライリンガルになること、留学経験を積み異文化を体験することの重要性を、高校生、大学生が共に学ぶ良い機会となるはずであったが、感染拡大防止、参加者の健康・安全を最優先するため中止の決断を行った。</p>
<p>⑮ 2月 IETLS対策講座を大学生と高校生に提供する。</p> <p>11月16日、11月30日、井の頭キャンパスにおいて本学在学学生及び高校生対象IELTS対策講座を実施した。杏林大学外国語学部の学生5名、高校生23名、合計28名の意欲的な在学学生と高校生が参加した。</p>	<p>⑮ ・IELTSは留学する際の資格・条件として広く国際的に認知された英語能力試験である。高校生・大学生にとっては英検・TOEICなどの他の試験ほど馴染みがないが、留学を志し、準備するためには是非受検してほしい試験である。本対策講座を受講した生徒・学生は4技能の英語能力を高めるばかりでなく、実際の試験問題を解答することによって高スコアを得点する能力が向上した。</p>

(注) 交付申請書の「補助事業の目的・必要性」、「本年度の補助事業実施計画」と対応させて分かり易く記入すること。